令和 3 年 11 月 20 日

北関東フォーラム

於：シムックス

中斎塾　北関東フォーラム
令和 3 年度 第 10 回

君子の過ちは日月の食の如し

おはようございます。

では、素読から参ります。本日の素読は子張篇の 21～22 です。文章の中に「賢者」とあります。今日の日経新聞を見ると、一面トップに「経済対策、見えぬ『賢い支出』」とありましたので、「賢人」という部分で繋がりました。日本は、賢い人が出ないまま 10 年、20 年、30 年と続いています。今回もコロナで 55,7 兆円という財政規模を昨日の閣議で決めたという記事でした。いつまでこういうことを繰り返すのかと感じました。素読の文章がそのまま現代に繋がることを今日は強く意識しました。

では、解説に参ります。

【二十一】子貢(しこう) 曰(いわ)く、君子(くんし)の 過(あやまち) は、日月(にちげつ)の 食(しょく) の如(ごと)し。過(あやま) てば 人(ひと) 皆之(みなこれ)を見(み)る。更(あらた)むれば 人(ひと) 皆之(みなこれ)を仰(あお)ぐ。

子貢が言うには、君子の過ちは日蝕・月蝕のようなものと考えればよい。君子は間違いをしても隠そうとはしないので、皆がそれを見ることが出来る。しかも間違いをすぐに直すので、皆がそれを仰ぎ見るのである。

子貢は面白い譬えをしたものだと思いました。ちょうど昨夜は月蝕でした。私は一週間ぶりに太田へ戻ったので家族と食事に行ったのですが、少し薄くなった月を家内がスマホで撮影していました。月蝕は日本人にすると当たり前になっているので取り立てて言う程のニュースバリューはないと思っていましたが、孔子の頃の日蝕・月蝕も、誰でも見られる・どこからでも見られると捉えているとお考え下さい。

今の時代に置き換えてみましょう。コロナ対策について、日本は後手ばかりという批評が多いですね。あれもこれも間違えて、後から色々手を打っています。一見すると、「間違えたのを直したのだから何がおかしい・・・」と弁明は出来るけれども、日本のコロナ対策の場合は後手というより予測も出来ませんでした。後手に回って、ずるずると失敗の連続ですから、全体で見れば間違いだらけではないかと思います。しかも間違えているこ

とをあちらこちら細かい所で誤魔化そうとしています。そして誤魔化そうとしているものも国民の目から見えてしまう、何とも情けない状況が続いていると感じています。

【二十二】衛の公孫　朝　子貢に問いて曰く、仲尼　焉くにか学べると。子貢　曰く、文武の道、未だ地に墜ちずして人に在り。賢者は其の大なる者を識し、不賢者は其の小なる者を識す。文　武の道有らざること莫し。夫子　焉くにか学ばざらん。而して亦　何の常の師か之れ有らんと。

公孫朝という人物は何人かいるので、わざわざ衛という国の名前を乗せています。

公孫朝が子貢に「孔子は大変物知りですが、誰について学んだのですか」と尋ねました。

子貢が言うには、文王や武王の政をご覧なさい。これは今でも滅びてはいない。先人の進んだ人として為すべき道をきちんと伝えているのだ。賢い人物は、その中で重要なものをきちんと記憶をしているし、普通の人は細々としたものを自分の記憶にとどめている。したがって文王の道・武王の道は今でも至る所に生き続けている。孔子はどこに行っても何を見ても学ぶことが出来るのだから、定まった師匠を持たれなかった。

・・・自分で意識すれば至る所、師匠だらけである。その人の心構えによって見方が違うのだとお考え下さい。

レジュメに戻って、今の時代に置き換えみるという部分をご覧下さい。21 章の論語について、「優れた人は間違えた時、素直に間違えたと言うものだ。ごまかしたりはしない。現在の人たちはどうだろうか？　佐藤一斎の師についての考え方を、いま一度見直してみよう」と書きました。

自分の胸に手を当てて考えた時、何か間違えたと思ったら誤魔化さないで、分からなかったから調べてみよう…と出来るかどうか。それが成長するかしないかの分かれ道になります。

佐藤一斎は「言志四録」の中で、人生第一等のコースを歩む者は、天地自然を師匠にすることが出来た人である。第二等のコースは、素晴らしい人物を師匠とすることが出来た人。優れた書物から師匠を見つけることが出来れば第三等である・・・と書き残しています。さて、自分の人生、師匠と呼べる人物がいたかどうか、又はいるかどうかお考え下さい。

西郷隆盛は沖永良部島に流された時、柳行李いっぱいに本を詰め込んで持って行きました。書物が師匠となっただけではなく、行く先々で良い先生に恵まれ、漢詩の手ほどきを

受けたり、書の手ほどきを受けるという具合でした。なぜそうなるかというと、常に師匠を求めるからだと思います。自分が書を書きたいと思っていて、教えてくれそうな人に出会うとすぐに頭を低くして教わる。そのような繰り返しだったようです。

西郷隆盛の頭が低いと感じるエピソードを一つご紹介します。西郷隆盛が渋澤栄一宅を訪ねた時の話です。渋澤栄一はご存知の通り明治政府に任官して、すぐに大蔵省を背負って立つような立場になったわけですが、「入るを量りて出ずるを制する」という考えで明治政府の財政を担っていました。西郷隆盛は自分が信ずる法案を通して貰いたいと考え、栄一の家に雪駄草履でひょこひょことお供を二人連れて頼みに行きました。話を聞いた栄一は、「日本国中その法案で出来るのであればよいが、西郷さんともあろう人が日本国全体を見ていないではないか・・・」と反論したといいます。すると西郷は、「なるほどそのとおりだ。はて、わしはあんたに頼み事に来たのか叱られに来たのか分からないな」と言って大笑いして帰ったという逸話があります。自分の頼み事は明治政府全体から見ると横車だったと素直に認め、引っ込んだわけです。普通の人ならば喧嘩をして帰るところでしょう。人物の度量が大きくなければ出来ないことです。西郷さんにはこういう話が沢山あります。

人物が大きくなればなるほど、相手の言う事を素直に受け止める。間違ったと思ったら、誤魔化さずに間違いを正す。西郷隆盛はその繰り返しをすることで人物が更に磨かれ大きくなっていったのだと思います。

今の時代に置き換えて考えましょう。最近、高齢者の起こす交通事故が多過ぎますね。記憶に新しいのは、老人がアクセルとブレーキを踏み間違えた池袋の事故です。90 歳の被告は色々な証拠を突き付けられてもなかなか認めませんでしたが、結果として裁判長に諭されて認めました。また数日前には、大阪のスーパーの駐車場で老人が運転する車が暴走し、次々に人をはねてしまった事故がありました。二つの事故を並べてみて、私はこう考えました。人間は平常の時は当たり前の判断をし、当たり前の行動をするけれども、一瞬間違えると頭が真っ白になって、アクセルだかブレーキだか分からなくなってしまう。

実は、そういう経験が私にもあります。頭が真っ白になった時はどうするか、それも自分で練習しておかなければならないなと、今現在は思っています。交通事故に限らず、頭が真っ白になるという経験は皆さんもあると思います。仕事で頭が真っ白になる事もあるし、急に襲われた時もそうなります。頭が真っ白になった時は、だいたい正常な判断が出来ずに間違った動きをしてしまう。これを防ぐには、頭が真っ白になる経験をしておいた

方が良い。そして、その経験を出来る限り持ち続けて、色々な場面で活用すればよいと思います。人間は自分で体験したものはしっかり覚えます。人から聞いたものは大概忘れます。自分で体験をしたら、それを更に掘り下げることが必要だと思っています。

22 章の論語に「賢者」「不賢者」とあります。そうそう賢い人間はいるものではありません。ですから「不賢者」（一般人）で結構です。一般の人物は、何でもよいからこれは大切だと思ったものをしっかり書き留めて記憶に残す。これを何度も反復する。そうすれば覚えます。

今朝も道場で山﨑先生に棒術を教えて戴きました。「形」を幾つか教えて戴きましたが、右から左に抜けてしまうのです。先生は慣れたもので次々に格好よく棒を操られるのですが、私の頭に残ったのは「突き」一つだけでした。しかも先生の動きとはまるで違うことをやっていましたが、捻れば良いという事なので、結果これで良しとしました。もう一つ、内股を強化する方法を教えて戴きました。二つも教わったのだから、もう充分だと思っています。これが「不賢者」の動きです。

ですから「不賢者」（一般の人）は、何か教わろうと思ったら幾つも幾つも覚えようとせずに、最低限一つだけ覚えればよい。そして一晩経つとだいたい忘れますから、夜寝る前に思い出して、朝も思い出す努力を繰り返せばよかろうと思っています。

恒例の質問

来月はもう師走です。コロナはずっと続いていますが、今年を振り返ってお聞きします。

○　今年は、良い日がずっと続いていたなと思う方

くれぐれも念押しをしますが、良い日・悪い日を客観的に比べるのではありません。良い日が 1 日でもあれば、それをずっと温め続ける。そうすると良い記憶だけが残ります。悪い日は時間の経過とともに薄れてきます。記憶とは便利なものです。

○　今年は比較的、嘘をつかなかった方

○　今年は有難うと言い、有難うと言われることが多かった方

有難うと言われることがポイントです。

○　今年は、身体の手入れをよくやったと思う方

○　今年は、自分を磨こうと思って一所懸命やったという方

皆さん手が挙がりました。大変よろしいですね。では最後の質問です。昨晩寝る時に何を考えて寝ましたか？

○　来年一年、もしくは明日、未来のことを過去形で考えて寝た方

私は、来年は西郷隆盛を本にしようと思っているので、西郷隆盛が出版出来て良かったなと思って寝るようにしていますが、昨晩は疲れきって布団に入ったら何も考えずにそのまま寝てしまいました。（こういう事もあります）

大人虎変

来年は寅年です。世間では「五黄の寅」という言い方をしています。虎の毛が抜け変わる時は、目の覚めるような色鮮やかな色に変わるということから「虎変」という言葉があります。ただでさえ強い虎が、目の覚めるような変わり方をする。「君子豹変」とか「大人虎変」と言いますが、組織のトップにいる人間がびっくりするような変わり方をする。日本の国で見れば、岸田首相が目の覚めるような変わり方をすれば素晴らしい年になる。しかし、きちんと色が抜け変わらなければ、ずるずると同じことを繰り返してしまう。そう考えればよろしいでしょう。したがって、来年が良いか悪いかは、国のトップの政治信条や行動が、色鮮やかに変われるかどうかだと思っています。

そう思って今日の日経新聞のトップ一面を見ると、賢い手は打てそうもない、打っていないという内容の記事でしたから、来年は困ったものだと思っています。「君子豹変」も「大人虎変」もあり得ないようです。国のトップがきちんと出来ないのであれば、それぞれの自治体のトップであるとか、組織や会社のトップが目も鮮やかな変わり方をするべく努力をせねばならないだろうと感じています。

常識を疑え！

では、コロナについて若干申し上げます。紹介書籍は『もうだまされない ― 新型コロナの大誤解』（西村秀一著　幻冬舎）です。書店に行くと、今まではコロナに関する本は政府が進めている政策について肯定的なものが多かったのですが、最近は批判をしているような本が増えていると感じます。その中で、読んでみていいなと思う本です。

来年は、日本政府のコロナ対応について疑問点が噴出してくると感じています。同時に、ワクチンをいくら打っても効果がないという人が世界的に増えてくると思っています。

ワクチン一つを例にとっても、コロナワクチンは従来のワクチンの製造方法とはまるで違うことはよく知らされています。また、ワクチン製薬会社と日本政府が交渉して多額のお金を出して確保したわけですが、その際にワクチンによって問題が起きても製薬会社に賠償責任は問わないということを承知で買っていることも事実です。もう一つ、日本政府がワクチン接種を進めるにあたって、「問題が起きたら政府が責任をもって面倒をみます」と発表したかというと、していません。言っているのは、「ワクチン接種は任意」です。

ワクチンを打った方々は当然、副反応など色々な事を承知した上で自己責任で打つという内容の承諾書にサインをしていると思いますが、書いてある文言をきちんと読んで納得してサインをしているでしょうか？

ですから責任をとる人は誰もいないのです。製薬会社は責任をとらない、買った日本政府も責任をとらない、お医者さんにも責任がない。最終的には自己責任です。

私が今、疑問に思っていることは、自己責任ではあるけれどもワクチンを打って死んだ場合、それからコロナに罹って死んだ場合に対して、その国の政府は保険を掛けるのが普通と聞いています。アメリカにしろヨーロッパにしろ、コロナで亡くなった人が増えれば増えるほど、政府の保険収入は大変な金額になると聞いています。第一次世界大戦や第二次世界大戦で各国の政府が焼け太りしたのは、戦争で死んだ人に対して一人幾らという保険金が入ったからです。日本政府がそういう保険をかけたかどうかの確証はとれていませんが、保険代理店の福島幹事はそういう事実をご存知でしょうか？

（福島幹事）・・・存じません。

福島さんは即答しましたが、この話が本当かどうか調べてみて下さい。専門知識があると思っている方が自分の専門分野で ＜そんな馬鹿な事があるか＞ と思ったら、自分の知識を一度疑うことです。自分の知らない事が世の中には沢山あります。そんな事は当たり前と思うこと、そんな事はあり得ないと思うこと・・・これらは一回自分の常識を疑う必要があります。

お時間が少なくなりました。来年の話を少し致します。

今申し上げた通り、来年はコロナワクチンに対する常識を疑う年です。それから、寅年は大変物騒な年になると思うけれども、とても良い年になるかもしれない、それが五分五分の流れになると思っています。詳しくは次号の季刊誌「知足」や通信号外で書かせて戴こうと思っています。

ただ世の中の見通しとして、先日シムックスの役員達に言ったのは、向こう 5 年間でハイパーインフレが起きる可能性が非常に高い。そう思って会社の 5 ヶ年計画に入れるように指示をしました。確信がなければそんなことは言いません。昭和 21 年 2 月 17 日の金融緊急措置令については何度もお話していますが、私はこれと同じことが起きると思っています。現在の日本の税金は、所得税は 5%～45%、住民税を入れて最高税率は 55%です。昭和 21 年の最高税率は 90%でした。それが、大分近づいたという氣が致します。ハイパーインフレが起きた時、どう対応するか。来年は、デフレ・デノミ・スタグフレーション・・・

こういうものを一つ一つ身近に感じながら進むと思います。

ちなみに終戦直後、金融緊急措置令を活用して大きくなった会社の一つとして、森ビルがあります。銀行にお金を預けさせられて旧円が使えなり、新札が出る。それらの動きが始まる少し前に、銀行預金を全部下ろしてレーヨンという会社の株を買ったわけです。その株が高騰していくお金で、土地を買い占めていった。それが今の森ビルのスタートになりました。イオンも同じです。岡田卓也社長のお姉さん（当時の岡田屋社長）が、戦争に負けた国はハイパーインフレが起きると学者の先生から学んでいた。日本でもハイパーインフレが起きると思って、そのための手を打ったわけです。面白いのはお金を下ろしただけではなくて、銀行の通帳に印字されている金額を担保にして借り出した新円で木材を買い集め、焼け野原に店舗を作った。それがイオンの前身です。

ということで、とんでもない事が起きた時、それを逆手にとってぐんぐん発展していく。そういう事を日本の先人たちはやって来たわけです。それを踏まえて、来年に向かって進んで行きたいと思っています。

最後に、政府はマイナンバーをどんどん進めていますが、マイナンバーと終戦直後の近似性を申し上げます。金融緊急措置令が出た時には、国民は財産を申告させられました。手元にある不動産や現金、貴金属類等を申告させられ、その後、驚くような課税が来ました。マイナンバーを国民 100%が持ったなら財産を全部申告したのと同じことですから、最高税率 90%の税金がどんとかかって来る。私は、マイナンバーはそれに直結していると思って今の政府の動きを見ています。ばら撒くための財源がなくて、ばら撒きは出来ませんから。

お時間になりました。本日の講話を終了致します。